

2004初日の出

菅田 忠志

午前6時、冬の夜明けは遅く、あたりはまだ暗く静かな朝だ。

小さなザックに、愛用のデジタルカメラや防寒衣それに温かいレモンティーを詰めたステンレス製のテルモスをほつり込み、ヘッドライトを片手に家を飛び出す。

今年の元日は、絶好の元旦日和に恵まれ、素晴らしい“ご来光”が期待できそうだ。寒さもさほどきびしくない。静かな街並みに、小さくびびく足音を心地よく聞きながら歩いていると、一足先に新年を迎えていることが、なにか少し得をした感じになってくる。

ときおり、路地の奥から人影が現れ、後になり先になりながら、目的の山にそれぞれ足をを進める。

40分も歩いたかどうか、高倉台の登山口に着き

ヘッドライトを点灯させ、長い階段の登山道にとりつく。この階段は、六甲全山縦走路の中でも、きびしい登りのひとつであるが、年々息が荒くなり、年を重ねてゆくことを、いやでも実感させられる登り道となっている。

最初のピーク「とがの尾山」のやぐらには、先着組が陣取っていたため、さらに足を進め、「馬の背」と呼ばれる、須磨アルプスの中でも風化の激しい、荒々しいピークの「横尾山」で2004年の初日の出を迎えることとなった。

神戸の初日の出の時刻は、例年7時6、7分だったと思うので、あと10分もすれば顔を出さだろう。あたりには、男子高校生らしい6人組や、親子の3人連れ、自分と同じく単独でやってきたおじさんの姿もある。それぞれがいろいろな思いを込めてその時”を待っているのだろう。”

ふと若い頃に、信州の北アルプスや中央アルプス

の雪山で迎えた、初日の出の情景がなつかしくよみがえってきた。

標高3000mの稜線で迎える初日の出は、まるで周囲の空気も凍りついているかのように、唯一素肌が出ている顔に突き刺し、まつ毛も白く凍らせてしまつた。

時には、素手でピッケルやアイゼンに触れるときもあつたりするが、相手が金属であれば、たちまちピタツとくっついてしまつた。肌の水分が瞬間に凍りつく現象なのか、皮一枚をはぎ取られそんな感触を味わつたものだ。

氷点下20度にもなる雪稜に、やがて雲海のかなたから姿を表わす。来光は、闇の世界の扉を少しづつ開けるように訪れ、雲海のじゅうたんからそそり立つ白い雪の山々を赤く染めていった。

高度や場所の状況は異なれど、こ来光は決してわげへだてせず、須磨の山でも素晴らしい“その時”

- 3 -

が始まつた。

紀伊の山なみにかつた雲の上から、一瞬キラツと天空に輝いた一筋の強い光が、これからはじまることとする荘厳な儀式の幕開けを知らせた。

ゆっくりゆっくりと現れ、瀬戸の海を赤く染めてゆく「太陽の素顔」を眺めながら、この地球上のすべての生命は、この光から受けていることをかみ締め、太陽の恵みを決して粗末にはいけないと、あらためて意識させられるひとときである。

今、地球上で進んでいる環境破壊や、人類のいがみ合いを「地球の生みの親」である太陽は、どんな気持ちで照らしているのだろうか。

なにか複雑な気持ちで下山し、帰宅する途中、少し緩やかな坂道を、赤い郵便自転車を押しながら近づいてくるアルバイト学生に、「重そうやなあ、こ苦労さん」と声をかけてみた。「はい！ おめでとございませう。ありがとございませう」と元気な声が返ってきた。

- 4 -

ちよつと一足先に味わつた、さわやかな新年をかみ
締め、彼等が配達してくれた年賀状を楽しみに帰宅
の足を急いだ。